

# 主日礼拝

2026年3月22日 10時20分～

司式:

奏楽:

「 できます 」

## 《神の招き》

前 奏 『イエスの担った十字架は (讃美歌 305 番)』  
H. ヴァン・ニューコープ

招 詞 イザヤ書51章22節  
賛 美 歌 3 1 2

## 《神の言葉》

祈 禱 聖霊の照らしを求める祈り  
聖 書 哀歌3章18～33節 (旧約1272頁)  
マルコによる福音書10章32～45節 (新約 81頁)

子ども説教  
交 読 詩 編 詩編22編25～32節 (27頁)  
賛 美 歌 5 4 3  
説 教 「 できます 」 八木浩史牧師

祈 禱  
賛 美 歌 3 0 6

## 《感謝の応答》

信 仰 告 白 使徒信条  
献 金 献金当番  
祈 禱  
主 の 祈 り (週報表紙、ホームページ掲載)

## 《派 遣》

頌 栄 2 6  
祝 福  
報 告  
後 奏 『愛するイエス (讃美歌 313 番)』 C.H. リンク

『哀歌』は、バビロン捕囚による王国滅亡のために都エルサレムの住民が受けた苦しみと痛みをテーマとした詩文学です。敵軍の破壊・略奪をはじめとした苦難だけでなく、何よりも、主なる神に背いてきたことによる神の激しい怒りの現れを感じていたことこそがイスラエルの民にとっての精神的な苦しみでした。しかし、絶望の中にありながらも、主が憐み深い方であることを思い起こします。憐み深い神にとって、民が辱められ、苦しみ続けることは御心ではないはずです。また真実な方である神は、祝福の契約を忘れず、必ず救ってくださるのだと信じるのです。状況が変わらなくても、神への信頼の中で、忍耐することができます。

『マルコによる福音書』において、エルサレムに向かう道の途上、主イエスはご自分がエルサレムで祭司長たちや律法学者たちに引き渡され、死刑を宣告して、異邦人に引き渡されて殺され、三日後に復活することを予告なさいます。そのとき、弟子のヤコブとヨハネが「栄光をお受けになるとき」に、主の両隣の座に着かせて欲しいと願い出るのでした。彼らは主イエスがお受けになる栄光が、どのようなものであるか、理解していなかったのです。「この私が飲む杯を飲み、この私が受ける洗礼を受けることができるか」と、主が問われると彼らは「できます」と答えます。二人の兄弟は無理解によって答えたのですが、主はもっと先を見つめておられました。「できます」の言葉が成就する時をです。

礼拝当番: (役員: ) 献金当番:  
音響: 映像: